

17. きらびやかな品々に彩られた古墳時代後期

古墳時代後期は6世紀にあたり、一須賀古墳群がつくられはじめたころから、聖徳太子が活躍する直前までの100年ほどを指しています。

古墳時代後期には、追葬が可能な横穴式石室が、大王墓をはじめとして直径10mぐらいの小さな古墳にも埋葬施設として広く採用されていきます。また、古墳時代を象徴する巨大な前方後円墳も数が少なくなり、規模も小さくなります。

古墳の副葬品は、金メッキした飾りをもつ大刀や馬具、金色の冠（かんむり）や履（くつ）などきらびやかな品々が多くなります。古墳時代中期にみられた甲冑などの鉄製武具は少なくなり、金メッキをして金色に輝くととても華やかな品物や装身具が副葬品の中心となります。

それら金色に輝く品々は当時の人々にとって、権威の象徴でもありました。そうしたものをもつことができたのは、ごく一部の限られた人だけだったようです。支配者やそれに連なる人たちは金銅製の冠、垂れ飾りが付く耳飾り、金銅製の沓（くつ）、柄に龍の頭などのかざりがつく大刀など、頭の前からつまさきまできらびやかな品々で身を飾っていたようです。